No.　‘23－4

（No.115）

Oct.　2023

ISGG NEWSLETTER

伊東市善意通訳の会

C O N T E N T S

1.　船、山に登る？　会員　菊池善次郎　2

2.　戻ってきた K’s Salon　会員　加藤　守康　6

3.　ミカンの話　会員　小西　恒男　8

【事務局便り】　15

【編集後記】　16

船、山に登る？

会員　菊池善次郎

船頭（船長）多くして船が座礁してしまった話ではありません。指図する人が多すぎて会議が意に反する方向にいってしまった話でもありません。今は昔の話です。南東欧の国の皇帝が実際に大型艦船を野超え山越えさせた話です。しかも 70 隻もの大艦隊を。

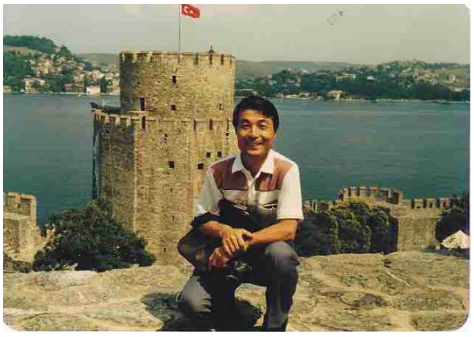
前に NEWSLETTER 記事でちょっぴり触れたことがありますが、現役中の 1986 年、私は日本からトルコイスタンブールに大きな橋桁ブロックを重量物運搬船という特殊な船で運んだことがあります。イスタンブールを東西に分けているボスポラス海峡に二つ目の橋を架ける建築資材です。

イスタンブール停泊中の本船
（1986 年 7 月）

橋桁ブロックは 1 個 100 トンとか 200 トンの重さがありました。特殊なクレーンを持った本船で事故なく慎重に揚げ荷をする必要がありました。その為本船は１週間以上イスタンブールに停泊しました。

日曜日、乗組員の慰労も兼ねて半舷上陸（交代々々の上陸）で市内観光ツァーを実施。その時、第２ボスポラス大橋建設予定地のすぐ近くにある「ルメリ・ヒサール城」という中世の城塞に行きました。

現在のトルコ共和国が生まれる重要な役目を果たした城だったと云うことでした。更に観光バスのガイドさんからオスマン帝国（旧称オスマントルコ）と東ローマ帝国の戦いなどの話



ルメリ・ヒサール城 / 筆者 /後方はボスポラス海峡（1986.7.9）

を聞くことが出来ました。今から 570 年前の 1453 年、日本で云うと室町時代ですが、オスマン帝国は東ローマ帝国との戦いに勝利する為に全くの奇策として 70 隻もの艦船をボスポラス海峡から山越えさせ東ローマ帝国を奇襲したと云う話です。英語の説明でしたが十分わからない部分もあり、後日いろいろ資料も調べました。以下、その時の話です。

<Pre-Information>

高校の世界史の授業で習ったかもしれませんがおさらいです。

●東ローマ帝国

映画のベンハー、クレオパトラ、ユリオス・カエサル（シーザー）、ブルータス等々が活躍した古代ローマ時代が終わると（西暦 395 年）、地中海沿岸、特に東地中海地方は東ローマ帝国が支配しました。帝国は 1453 年オスマン帝国に滅ぼされるまで 1000 年も存続しました。

しかし安泰した 1000 年ではなく、近隣諸国やモンゴル等々外敵の圧力、経済負担、宗教・政治闘争、内部分裂などなどによって繁栄と衰退が交互に繰り返されました。最も繁栄した 6 世紀頃は西地中海沿岸（現在のスペイン）や北アフリカをも含む広大な地域を支配していましたが晩年は首都コンスタンティノープル（現在のイスタンブール旧市街地域）とエーゲ海等に少しの領土を残すのみに衰退、そして 1453 年 5 月 29 日オスマン帝国猛攻により首都陥落、東ローマ帝国は滅亡しました。

●オスマン帝国（昔の教科書ではオスマントルコと記載されている）

黒海の南側地域アナトリア地方に建国され（1299 年）その強大な軍事力によって世界が恐れる強国となっていった。1450 年頃までには黒海の南側全土と北側及び西側を自分のものとした。

そして 1452 年東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルの攻略を開始した。然し乍ら、衰えたとは云え東ローマ帝国の守りは固くなかなか陥落させることは出来ず苦戦を余儀なくさせられました。首都の西側から攻めたりボスポラス海峡側から攻めたり、いろいろやるけれど侵攻出来ない。そして 1453 年、以下に述べる奇想天外の奇策によって遂に東ローマ帝国を滅ぼすことになります。

●ルメリ・ヒサール城

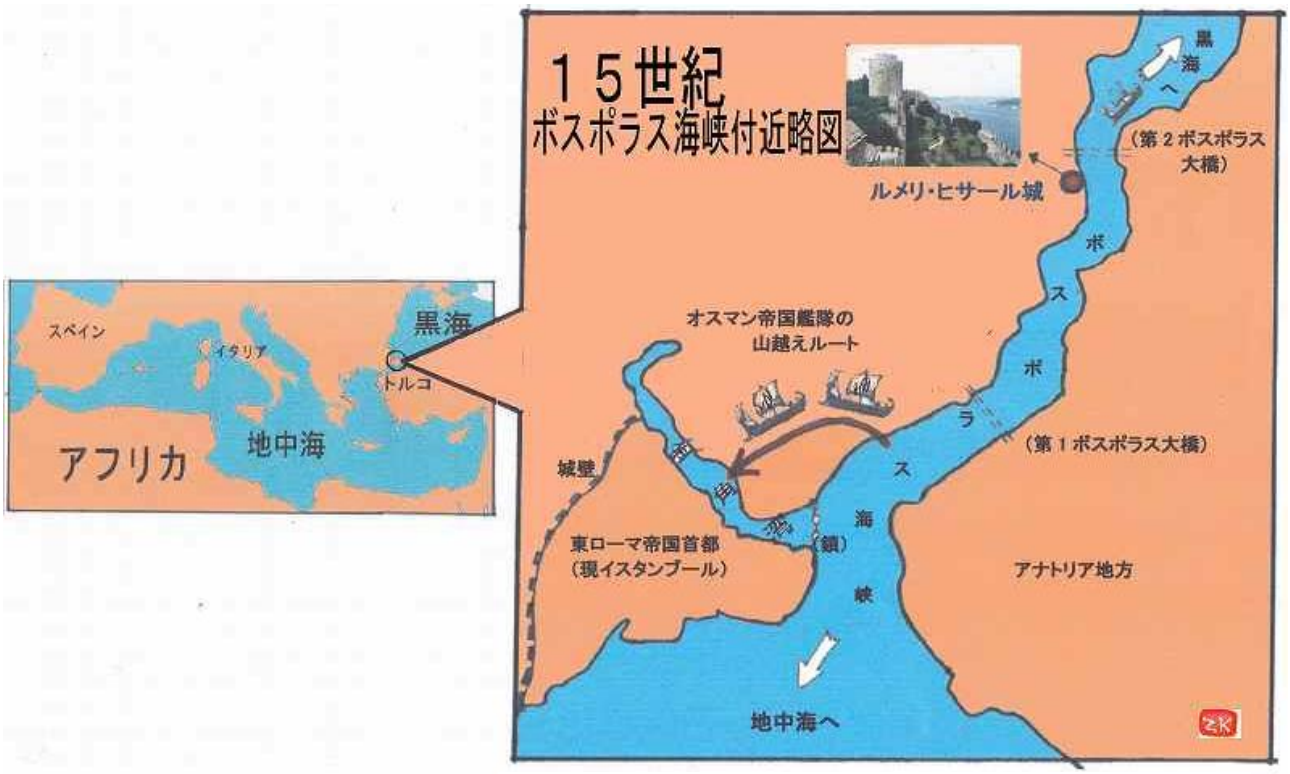
オスマン帝国がどうしても攻略できない東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルを攻める拠点として造った城塞。３基の巨大な塔がある石造り。高さは 20m～35m の城壁で囲まれている。全体の面積は 3 万平方メートルでコンスタンティノープルから約 10Km 北のボスポラ海峡沿いにある。

オスマン帝国の皇帝“メフメト２世”が 1452 年にわずか 4 ヶ月という驚異の短期間で造ったと云われる。現在も立派に存在する。これによりオスマン帝国はボスポラス海峡を完全に封鎖、戦況を有利に運び、翌年（1453 年）東ローマ帝国を滅亡させることに成功しました。

例えて云うならば豊臣秀吉の小田原北条氏攻めの“一夜城”とでも云えるか。

＜オスマン帝国艦隊の山越えの話＞

15 世紀、オスマン帝国が東ローマ帝国に侵攻、攻略するのは大変なことだった。それは東ローマ帝国が晩年その勢力が衰えたとは云え首都コンスタンティノープルの守りは非常に堅かった



オスマン帝国艦隊山越えルート

からです。首都の西側全域には

長大堅固な城壁があり、北側も東側も南側も海岸線によって守られていました。西の城壁は長さ10Km。内壁/外壁/掘の三重構造。内壁と外壁の厚さは5m～10m、　高さ10m超。堀の幅は20m。従って城壁全体の厚みは計50～60m。城壁の所々には高さ40mの見張り台が造ってあった。ボスポラス海峡に接する北側の内海、金角湾はその入り口に強固長大な鎖を設置、如何なる敵国の艦船も内海に入れない構造となっていました。コンスタンティノープルが難攻不落の城塞都市と云われた所以です。

　オスマン帝国は海側から攻めても西の城壁側から攻めてもどうしても東ローマ帝国に侵攻することができませんでした。1453年、そこでオスマン帝国の皇帝メフメト２世は比較的守備の弱い金角湾に山越えで艦船を入湾させるという奇想天外の奇策を考えました。金角湾入り口から約5Km北のボスポラス海峡から陸地に向かって山道を造り、山道には丸太を敷き詰め、丸太の上と艦船の船底に樹脂をたっぷり塗って滑りやすくし、

オスマン帝国艦隊山越えの想像画

（インターネット資料より。出所不明）

大勢の引手で船を曳き、標高60mの山を越えて艦隊を金角湾に入れたのです。

しかも1隻だけでなく70隻もの大艦隊を。

　金角湾に浮かぶ70隻のオスマン帝国の艦船。予想だにしなかった光景に東ローマ帝国はびっくり仰天、兵士は一気に戦意を失い、その後短期間でコンスタンティノープルは陥落、ここに東ローマ帝国1000年の歴史は終焉（しゅうえん）を迎えました。1453年5月29日のことでした。

　勝利したオスマン帝国はその後いろいろな変遷を経て1923年トルコ共和国として独立しました。

＜あとがき＞

　10月初めイスラエルとパレスチナの紛争が又々始まった。1年半続いているロシア/ウクライナ戦争に終わりが見えない時今度は中東です。現地の状況を伝える生々しいテレビの映像は目を覆いたく

なる悲惨なものです。高層マンションや商業施設がロケット弾によって破壊され空高く黒煙が上がる。

路上には倒れた人や子供を抱いて逃げまどう人々。多数の人が死亡、瓦礫の山となった街。目の前で夫を失い天を仰いで泣き叫ぶ妻。家も家族もなくなって泣き叫ぶ子供。これが映画や中世の昔話ではなく今本当に起こっている現実だと考える時、心が絞めつけられる気持ちです。ロシア・ウクライナ戦争でも同じ様な場面を幾度か見ました。

古代、中世、近世、近代、現代と人類の争いは続いています。平均すると 100 年に 100～150 件、1 年に１～1.5 件の戦争や紛争が世界のどこかで勃発している計算になるらしい。そして大勢の人の命が失われ、大勢の人が飢餓・貧困に苦しみ、住む所を失い、国まで失われてきました。

愚かなりけり我ら人間！　何か世界から争いごとがなくなる未来永劫(えいごう)持続可能な奇想天外の奇策はないものか。

戻ってきた K's Salon

会員　　加藤　守康

コロナ禍で３年あまり中断されていた K's Salon が、令和５（２０２３）年７月６日（木）に再開され、再開後２回目が９月２６日（火）１９時から K's ハウスの Manager 岩村幸雄さん（会員）のご協力により開催された。この夜は、K's ハウスにも、隣の東海館にも、提灯のあかりが全面に華やかに灯され、旅情をそそる雰囲気が漂っていた。

１８時３０分頃から、１階正面奥にある会場となるラウンジ（Lounge, 談話室・和室）に、伊東善意通訳の会（ISGG）のメンバーが集まってきた。小松透・二美夫妻が茶菓子と飲み物を用意してくれ、小西さん、曽我さん、相良さん、加藤達雄さんに私を加えた７人がゲストを受け入れる準備を整え、外国人旅行者のラウンジ訪問を待つばかりとなった。外国人旅行者は何組か到着していたが、Check in の手続きや食事の準備など忙しそうで、しばらくの間、我々メンバーは雑談しながら過ごした。

１９時、開始予定の時間となり、最初にラウンジにやってきたのは、３０代くらいのドイツ人カップルであった。デュッセルドルフ（Dusseldorf）から来た男性マーヴィン（Marvin）さんと女性ダリア（Darya）さんで、日本食ではウナギが大好きだということ、ドイツでは三菱電気が幅広く進出していること、ダリアさんはベラルーシ（Belarus）の生まれであることなど話してくれた。

次に男性が１人で入ってきた。アメリカ人のエリック（Eric）さんで、彼はドイツで生まれ、アメリカ・ミシガン州の学校で英語を教えており、今回生徒を何人か引率して来日中とのことであった。母親がニュージーランド人（New Zealander）で、米と NZ の 2 国の国籍を持ち、両国で活動するなど国際色豊かな人であった。翌日大室山と伊豆シャボテン動物公園へ生徒たちを連れて行くと話していたので、観光リフトで頂上へ登り、山頂を歩いて一周することを勧め、動物エリアでは、温泉に入るカピバラを見ると良いなど情報を伝えると、とても喜んでくれた。

その後ラウンジで歓迎したのは、３０歳前後のフランス人女性のメルティム（Meltim）さん。市の職員で、日仏交流で九州の鹿児島や熊本などを巡り、伊東にも立ち寄ってくれたようである。

続いて２０代後半に見える女性と男性が相次いでラウンジを訪れた。両親は中国人であるが、自分はアメリカ国籍というアナ（Ana）さん。大学で Ph.D.（専攻は歴史）を目指しているとのこと。北海道・東北・中部・中国など各地方を旅しているようで、特に祭り・酒・特産品・慣習等に興味を持ち、見聞を広めてきた行動派女性に見受けられた。

最後にラウンジに入ってきたのは、長身のフェイルム（Feilm）さん、ドイツ人男性であった。彼も外国と日本各地を旅してきたようであるが、明日から K's ハウスで３か月間働くと話していた。

今回は、日本人７人と外国人旅行者６人、計１３人による Salon となった。旅行者はドイツ人３人、アメリカ人２人、フランス人１人で共通言語は英語であったが、ドイツ語が話せる日本人が参加していたら、なお話が盛り上がっていったかもしれない。

外国人旅行者はそれぞれ様々な方法で情報を集めているが、現地の人々からも最新の情報を得たいと思っているようである。我々メンバーも、市内や郊外の見どころや交通手段等、彼らの希望に対応できるようにしていくのも、将来の外国人への案内ガイドに繋げていく１つの道標になるかもしれない。今回は１３人がまるく車座になり、英語を通して語り合い、和気あいあいと過ごし、以前の ISGG

の活動の１つである K's Salon が戻りつつあることを実感できた。K's Salon がこれからも国際交流の一環として継続していってほしいものである。

ラウンジで茶菓子をつまみながら語り合う

和気あいあいと情報交換中

ミカンの話

会員　小西　恒男

先日知人宅を訪問した際、書庫から興味ある本を見つけた。タイトルは「静岡県蜜柑史」（静岡県柑橘販売農業協同組合連合会発行、昭和３４年９月出版）で、A4 版で１，１００ページの膨大な内容の本である。

伊東はミカンとのつながりは深い。北原白秋が作詞した「伊東音頭」（昭和４年）には「山ではしいたけ、ミカンにたちばな……」とあるように市内のいたる処にミカン畑が目につく。

また、戦後ＮＨＫラジオで放送された「ミカンの花咲く丘」は伊東の歌であることはよく知られて

いる。

私の住んでいる鎌田地区にも多くのミカン畑が見られ、私の隣接地はミカン畑で、現在緑色、黄色に色づいたミカンが撓（たわわ）に実っている。

我が家の隣のミカン畑。黄色い実をつけた木々のかずかず。後方中央に見える小高い山は小室山（2023 年１０月撮影）

かねてよりミカンについて興味をもっており、機会があれば調べてみたいと思っていたので、この機会を利用していくつかの事柄をピックアップして紹介する。

（１）柑橘類の種類

（２）柑橘類の英語

（３）世界の柑橘類の歴史

（４）日本の柑橘の歴史

（５）伊東（伊豆）のミカン

（１）柑橘類の種類

今日我々の周囲にはおびただしい種類のミカンがある。これら多種類のミカンを総称して柑橘（かんきつ）という。日本国内に存在する柑橘の種類は３００種以上と云われている。

主なものを取り挙げてみると

温州（うんしゅう）ミカン、小ミカン、夏みかん、ネーブルオレンジ、レモン、伊予ミカン、鳴門ミカン、三宝柑、ポンカン、タンカン、ブンタン、タチバナ、ダイダイ、ユズ　などがある。元々日本には「タチバナ」という我が国独特の柑橘のみが野生していた。一方では海外の原産地から色々な柑橘類が日本に伝えられて来ると同時に、国内でもやがて全く新しい品種が偶発され、時代を経るにつれて様々な柑橘が出現し、ついに膨大な数になった。

柑橘類を大まかに分類すると次の３つに区別することが出来る。

① 古来から日本の国の山野に自生していたもの

日本の山野に自生していたのはいうまでもなく「橘（タチバナ)」である。

② 海外のどこかの原産地から日本へ伝播してきたもの

ユズやダイダイは海外から渡来し、レモンやクネンボも外国より伝えられ、ネーブルオレンジもまた渡来品種であった。

③ 後世になって日本国内で偶発して出来たもの

温州ミカンや伊予ミカンの原種はタチバナ（？）で、近世になって日本の国内で偶発して出来たものである。

（２）柑橘類の英語

① 柑橘の英語は “Citrus Fruits”で表される。この中には “Orange”（オレンジ)、”Citron”（シトロン)、”Tangerine”(タンジェリン)、”Lemon”（レモン)、”Mandarin”（マンダリン)、”Grape Fruits”（グレープフルーツ）などが含まれる。

② ミカンといえば「温州ミカン」が一般的であるが、英語では ”Tangerine”タンジェリン）”を使用する。

③ “Orange”（オレンジ）もミカンを表すが、オレンジやダイダイも含むミカン属の果実をい

う。ダイダイは　bitter orange　である。

④　”Mandarin”（マンダリン）はMandarin orangeのことである。ご承知のごとくMandarinは中国を表す言葉であるから、マンダリンは中国産のミカンのことである。

（３）世界の柑橘類の歴史

柑橘類の原産地がアジアであることは古くから知られていた。

植物学で有名な田中長三郎博士（1885年生まれ）によると、柑橘の原産地は以下の五地帯に分類される。

①　インド地帯

②　中国地帯

③　日本・沖縄・台湾地帯

④　マレー半島・インドシナ地帯

⑤　マレー群島・太平洋諸島地帯

各々の地帯に分布している柑橘類の詳細が記載されている。

インドと中国では２，０００年以上も昔から個々に柑橘の利用、栽培が行われていたが、これらは時代と共に西に伝わり、東へ進んで次第に世界各地に浸透して行った。

柑橘が初めてヨーロッパに伝播したのはＢＣ３世紀頃のことで、アレキサンダー大帝のアジア遠征でシトロンを持ち帰っている。ペルシャのメディアから持ち帰ったということで「メディアのリンゴ」という名称をつけている。

その後アジアの柑橘を各地へ伝播したのはアラビア人で、彼らは大規模な隊商を組んで通商や聖地巡礼を行い、色々な柑橘が聖地イスラエルに集められた。レモンがイスラエルに入ったのは１０世紀頃で、１３世紀にはイタリアのシシリー地方に伝えられ、シシリーが今日世界屈指のレモン産地となる端緒を開いた。

こうしてインドの柑橘が陸路を経て次々にヨーロッパに浸透していた一方、１４９２年、コロンブスがアメリカ大陸を発見したことに刺激され、スペイン人、ポルトガル人、オランダ人等の海外進出が盛んに行われるようになり、海路からもアジアの新しい柑橘が世界中にもたらされるようになった。

一方、日本・沖縄・台湾地帯に原産した柑橘はタチバナである。タチバナは日本の中南部から南の方へ、奄美大島を経て台湾の山岳部まで野生している。

タチバナの歴史は古く、このタチバナを最初に記録しているのは３世紀に書かれた中国の文献＜魏志倭人伝＞の中に我が国の山野に産する樹木の見聞を伝え、その中に「橘」が見られる。

又、万葉集にもタチバナを詠んだ歌は数多く見られる。

（４）日本の柑橘の歴史

日本の柑橘とその伝来を時系列的に示す。

ア）はじめにタチバナがあった。

イ）初めて我が国に輸入された柑橘は奈良時代の「古事記」によると、「トキジクノカグノコノミ」と呼ばれていた。その後の研究により「トキジクノカグノコノミ」は「ダイダイ」であるといわれている。最初に輸入されたのはダイダイということになる。

ウ）ダイダイの次に伝えられたのは「コウジ（柑子）」といい、平安時代には本格的な食用ミカンとして記録されている。

エ）室町時代になると「クネンポ」という品種が外国から伝えられる。今日の温州ミカンにかなり近いもので、果肉は柔らかく、果汁も多くて、生食用のミカンとしては非常に優れたものであった。

オ）鎌倉から室町時代になると小ミカンとキンカンが入ってくる。この両種はともに支那の原産で、支那から伝えられたものである。小ミカンの栽培がもっとも古くから行われたのは、九

州肥後の国で、やがて九州一帯にひろまり、更にはわが国全体に広がっていった。特に紀州のミカンが有名になって、小ミカンを紀州ミカンの名前で呼ぶようになった。

カ）江戸時代になって温州（うんしゅう）ミカンが登場する。現在のミカンの主流である。

その原産地は近年の研究で、日本において偶然に発生した独特の柑橘であると考えられるようになった。発生地は九州肥後長島方面であろうといわれている。その後九州から全国へと展開していき、ミカンの主流となった。

キ）温州ミカンの出現とあい前後してわが国に現れた品種にナツダイダイがある。夏ミカンである。

ク）時代を下って明治に入ると海外諸国との往来が激しくなり、アメリカからオレンジとレモンが輸入され、引き続いてネーブルオレンジが導入されるようになる。

（５）伊東（伊豆）のミカン

① 江戸時代享保のころ（1730 年代）暴風で九州の漁船が西伊豆に漂着した。難破船の船員を地元の住人が手厚く介抱した。村人へのお礼として小ミカンの果実を数個残して帰った。この小ミカンの種が、後年伊豆半島の北西部一円にミカンの大産地をなさしめる端緒となった。これが伊東でも知られている西浦ミカンの始まりである。

② 明治２０年、西浦地区にはじめて温州ミカンが導入された。更にネーブルオレンジを導入して、事業の拡大を図った。

③ 稲取の田村又吉という人が明治２６年、１本の夏みかんの苗を購入し、自身の畑に植栽した。これが契機となって伊豆全体で夏みかんの栽培が行われ、伊豆の名産となっている。

④ 鎌田神社のタチバナ　（写真）

鎌田神社の鳥居脇にタチバナの大木がある。このタチバナは「おとどいのタチバナ」と呼ばれている。おとどいとは兄弟のことである。

時は 12 世紀に遡る。伊東祐親の娘「八重」と源頼朝の間に「千鶴丸」（男子）をもうけたが、平氏の世に源氏の子は害になるとして祐親は断腸の思いで千鶴丸を殺そうとする。殺害場所へ連れてゆく途中で鎌田神社（の場所）に立ち寄り、タチバナの枝を持たせる。その後千鶴丸の死体は富戸の海岸に流れ着く。地元の住民が不憫に思い千鶴丸が握っていたタチバナを植えたところ、木は根付き、現在富戸の三嶋神社に連綿と生き続けている。何代も続く２本の木をおとどいのタチバナと呼ぶ。

鎌田神社鳥居わきの大木が兄弟（おとどい）のタチバナ。直径３～5cm の実が数多く撓に実っている。（2023 年 10 月撮影）

日本のミカンの代表種といえば温州ミカンと小ミカン（紀州みかん）である。

当初これらは日本古来の原種タチバナから何代にもわたって品種改良されたものと思っていた。

しかし今回の調査を通じて少し考えが変わった。単純にタチバナが原種とは言えないことが判明した。例えば小ミカン。原産地は支那（中国）であることが明らかになっている。温州ミカンについては不明なところが多い。

今回の調査では多くの新しい知見を得ることが出来、更にニュースレターに掲載してもらえるという二重の喜びを体験した。

日常の気づきや調査をまとめてニュースレターに掲載してもらう喜びを、会員の皆さんにも是非

体験してもらいたいものです。

最後に”apples and oranges”というフレーズがあります。日本語で「月とスッポン」の訳です。

Comparing the two teams is like comparing apples and orannges.

（２つのチームを比較するのは月とスッポンを比較するようなものだ）

月もスッポンも外見は丸いが、中身は全く違う。２つの異なるものを比較するのは意味のない事である事の例えを表している。

月とスッポンの解釈は広辞苑によると、2 つのものの間に非常に差があることの例えとなっている。　果たしてどちらかな……？

〈事務局便り〉

8 月は例年のごとく当会の活動はお休みでしたが、9 月より月例のイチゴサロン、土曜会、英語サロンそして K's　サロンが開催されました。

—イチゴサロン

多くの項目を話し合っていますが、今後の活動で決定した事を記します。

・国際交流フェスタ　in ITO　（11 月 5 日　観光会館別館）：

当会のブースにて活動広報及び会員募集を行います。

・ALT の親族との親交（11 月 6 日　トスカーナ）：

英語サロンの Frequent Participant である Ethan Bond さんのご両親が来日されますので歓迎の昼食会を開催します。

・2023 年忘年会

日にちを 12 月 9 日に決定。詳細は次回のイチゴサロンで決定します。

・英語講演会　（2024 年 2 月 25 日　川奈ホテル）：

Mary　Corbett 氏による Marilyn Monroe と Joe Demaggio 夫妻の Honeymoon

来日時に滞在した川奈ホテルで開催される事になりました。

—英語サロン

9 月に続き 10 月も 3 人の ALT の参加を得て開催されました。　10 月は 31 日に開催されたこともあり参加者がハロウィーンの仮装をして活発な会話を楽しみました。　又、当日は ALT の一人の Shimeika の誕生日でもありお祝いをしました。

—K‘s　サロン

9 月及び 10 月に K‘s House にて開催されました。　海外旅行者の増加に伴い多くの宿泊者が参加してくれ気軽で楽しい集まりになりました。

〈編集後記〉

長かった夏がやっと過ぎ去ってくれ、爽やかな観光シーズンがやってきました。日に日に鮮やかに染まっていく木々の紅葉を楽しむ季節ですが、テレビは毎日菊池さんの「あとがき」にあるような悲惨な状況を伝えています。双方にいろいろな理由はあるのでしょうが、そこにあるものはただ殺戮です。

同じ戦いなのですが、この７０隻の艦隊の山越えや、秀吉の一夜城の話は人の考えをつくした突飛なアイデアで勝利をつかむ「あっぱれ」を感じます。

コロナ禍のブランクがありましたが、ようやく K’s サロンが再開されました。旅行者の方々だけでな

く会員にとってもとても楽しい活動です。サロン時に誰がどこの国から来てくれるかわからない・・そんな「ミステリーツアー」的な楽しみもあります。お世話役の会員の方々のお膳立てと、K’ｓハウスのスタッフの協力で、盛り上がりつつあるこの会が長く続きますように！

伊東の山々には多種のミカンが多くありますが、小西さんのようにいろいろな方向から「みかん」をながめたことはありませんでした。名前が付いていなくても交配でめずらしいミカンがどんどん生まれています。原種返りというか、橘のような鋭い棘を持ったものや、その同じ木が年月が経つと棘が消えてしまうものなど、不思議な木がたくさんありますね。

小西さんが書いていらっしゃるように皆様も自分の興味を持っているものについて書いて、Newsletter に投稿しませんか？　　どんなテーマでも歓迎します！

（稲葉　記）

伊東市善意通訳の会（ISGG）
会長　稲葉　尚子

（事務局）　413-0232
伊東市八幡野 1324-40　　主原　一雄
e-mail：larryn@estate.ocn.ne.jp
http://itosgg.info/

（編集委員）　稲葉尚子、曽我廣子、加藤達雄